

筑波大学日本文学会会報

第4号

昭和54年12月

ある研究室の思い出	伊藤 博	一
研究室だより		三
卒業生だより		四
筑波大学日本文学会会則・ 細則・研究室内規・研究科内規		九
住所録		一一

ある研究室の思い出

伊藤 博

昭和三十年代の末、三年ばかり、私は、京都大学の講師および助手として、文学部・教育学部の講義一駒ずつを担当しながら、国語国文学研究室の、火元責任者のような役を勤めたことがあります。

研究室の構造は、次のようなものでした。一階の真中に広大な共同研究室があり、部屋には、大学院生の一人一人の机がしつらえられ、囲りや仕切りには、日常の研究に必要な図書がぎっしり並べられていました。仕切られた中央の座談室のところに研究室の費用で雇った女の子がおり、私はその部屋の片隅に別途に構えられた小部屋で、講義の準備をしたり、「国語国文」の編集をしたりしていました。この共同研究室の南側の部屋には浜田助教授（国語学）が、北側の部屋には佐竹助教授（国文学）が居を構え、二人の教授、すなわち、遠藤教授（国語学）と野間教授（国文学）は二階に陣取っておられました。

この四人の人々は、すべて自室に個人の図書を持ちこみ、出張の時と正月の三日ばかりとを除いては、連日登学し、研究も大学院の講義も、そこで行ないました。登学時間も、皆さんおおむね一定していて、遠藤・野間・佐竹の三氏は九時半ごろ、浜田氏は、六時と決っていました。浜田氏は、起き抜けて登学し、洗面も排便も朝食も、すべて大学でとり行なったのでした。ある日、氏が洩ら

した冗談を、私は今も忘れません。「大学で排便をすれば汲取代が助かり、それだけ本が買え、学生に奉仕することができる」。

ちなみに、当時、汲取代は、一軒一軒の量によって算定されていました。これに対して大学院生はどうであったかというと、誰も彼も、自由な時間に登学し、しつらえられた机で勉強したり、座談室で討論をしたりしていました。大学院生のアルバイトは原則として禁じられ、やむをえない場合でも一週に一日、主任教授の許可を得て行なわれることになっていました。第一、研究室の雰囲気が一日でも休めば、それだけ厳しさや進歩から取り残されるという状態でした。教授たちは、たいてい、十一月末には講義をやめてしまったのですが、昼休みに、共同研究室の座談室に集まって、院生と共に雑談に花を咲かせることは、年中、休みなしに続けられたのであります。なお、学部が、この研究室に出入することは、勿論自由とされています。

野間教授は、先任の澤瀉教授と同様に、部屋の隅に畳を三つばかり敷きつめ、座り机で勉強していました。その外れには常に炭火で湯がわかされており、夕方、所用があつて参上すると、頃はよしと、それでお燗をし、しばしば飲ませてくれました。この頃合いを目指した者が、学部や大学院の学生の中にも、少なからずいたことはいうまでもありません。それから祇園などへくり出したこともありますが、そんなことがない時は、野間教授は、たいてい、十時ごろまでは研究室におられました。

私が着任した早々、遠藤教授の研究室の引き越しがありました。教授の書物を、麻紐で束ね、院生の労力で移動したのですが、そのあと、使用ずみの紐を、全部ごみ箱に捨てさせました。これを知って、浜田助教授が、火の玉が出るような大声で、私をしかりました。「僅かな紐といえども、研究室、ひいては国家の費用で買ったものだ。これを勝手に捨てるのは許しがたい」というのです。

私は、いささかむっとしながらも、発言には道理のあることなので、これを全部とりもどして、整理しました。この紐が、その後、いろいろなことに役立ったことは申すまでもありません。浜田氏は、私個人に來た小包を、私がハサミで切って開封しても文句は言いませんでした。しかし、研究室に來たものについては、事務員に、ていねいに紐をほどかせ、包み紙と共に保存させました。氏によれば、紙は、やがて冬、ストーブのたきつけにしたり、裏返して再送の包みにしたりするのに役立つというのです。

昭和四十年の三月、私は東京へ転出することになりました。その末のある日、拙宅に、品格の高い婦人が現われました。聞けば、浜田夫人だとのことです。浜田氏の手紙があつて、「いろいろお世話になりましたので、代りにご挨拶に伺わせました。持参した品は、心ばかりの記念です」と記され、寛文七年刊本『新撰万葉集』上下と上品なネクタイが添えられていました。時に、夫人が言わ

れるには、「目下の者が目上の者に挨拶するのを主人は狂人のように嫌いますのでよろしく」とのことでした。それで、事は、私が東京で礼状を書いたままで終わりました。

昭和四十九年、日本文学の最年長教授として筑波大学に迎えられた時、私がひそかに構想した日本文学研究室は、以上に述べたような状況を持つものであったことを、ここに正直に告白したいと思います。時をかけてこんな雰囲気、こんなシステムに持って行くという野心に燃えて、私は、今回の会報に、再度掲載した、もろもろの規則を作ったのであります。しかし、私の徳のあまりな不足から、構想は稔るところか、むしろ、逆の方向に動きつつあるように見受けられます。私は、会議会議でいたずらに振りまわされて四年を過しました。片や、この頃入学した院生の中には、無断で立てつづけに講義を休んだり、届けがあっても、学会から帰った翌日に講義を行なう教官に対し、「学会に参加して疲れましたので休みます」と理由づけをする者があつたりする始末です。

この三月、われわれが、杖とも柱とも頼む小西甚一先生が、多くの足跡を残して退官されました。今こそ、私どもは心機一転して、研究室運営にとりくまねばならないと考えています。

昭和五十四年十一月十七日

先生の研究室はA六〇五（内線四一二六）である。